

余の隣人Sは食人者<sup>カニバリスト</sup>で或つた。

余は貧乏書生なれば、長屋暮し<sup>なり</sup>也。

或る夏の日、S、頸<sup>くび</sup>の無い嬰兒<sup>えいじ</sup>の骸<sup>むくろ</sup>を抱きて廊下に居む。

「君何ゆえ嬰兒を抱きつ」

余問ふに「我此れを喰わむとす」

「何ゆえ喰ふか」

「我食人者なる故」S悠然として答えり。

あ、食人者<sup>カニバリスト</sup>！

合点に手を打ちて余は自室に戻りぬ。

余は後日、Sと屢々<sup>しばしば</sup>顔合わせむ。

Sの屍を重たげに引き摺るを視る事数度、余は運搬するを手伝ひて遂にSの部屋へ入る。

余と同じ畳間、唯、片隅に大小の骨積み上げらる。

「骨を何に使ふや」

「保存食<sup>なり</sup>也」

あ、保存食！

其の日も我々は屍を運び、後<sup>のち</sup>Sの部屋にて寛<sup>くつろ</sup>げり。

S、何をか考え込めるが、突如卓を叩きて云ふ。

「我、人肉を喰いし者の味を知りたし」

云ふが否や、彼自らの腕を引き千切り、其れを呑はむ。

「美味しや」

云ひて腕を喰い脚を喰いて胎を破り頭部のみとなりて

「あな美味し」

一気呵成に骨を喰らうと窓を破り飛翔し後には何も残らじ。

誠に食人者<sup>カニバリスト</sup>とは摩訶不思議な者也！